第１０回　足利市学校教育環境審議会　会議概要

日時：令和４(2022)年８月 25 日(木)14：00～15：30
場所：足 利 市 役 所 教 育 庁 舎 ４ 階 会 議 室

○出席者
　委　員１１名（１３名中）
　岩田副会長、須田委員、岡村委員、橋本委員、安藤委員、近藤委員、清水委員、
　沼田委員、　源田委員、古川委員、髙橋委員

　事務局１５名
　岡田教育次長
【教育総務課】石井課長、亀山主幹、藤生指導主事、齋藤主任
【生涯学習課】齋藤課長、丸山主幹、小倉主査
【学校管理課】倉上課長、本田主幹、栗原主幹
【学校給食課】清水課長
【学校教育課】岡部課長、林主幹
【教育研究所】真下次長

○会議次第　１　開会
　　２　委員の任命及び紹介
　　３　報告
　　（１）あそ野学園義務教育学校の視察結果
　　４　議事
　　（１）小中一貫教育制度の考え方
　　（２）学校再編に向けた基本理念
　　５　その他
　　６　閉会

○会議の公開について：公開

○傍聴者数　　１名

1　開　会

2　委員の任命及び紹介

〇事務局　新たな委員を紹介。

3　報　告

（1）あそ野学園義務教育学校の視察結果

〇副会長　前回は、先進事例である「義務教育学校」ということで佐野市のあそ野学園の視察に行った。委員の皆様から、良かった点、課題と思う点、全体的な感想・意見をまとめたものが資料2としてある。本日は、意見交換ではなく、私の方から総括報告という形で、皆様と共通理解を図りたいと思う。

皆様のご意見としては、総じて、良い点としては、「義務教育9年間を見通した学校運営の良いモデルを見ることができた。」とか、「学校再編に関しては、各小中学校の共通理解を図るための努力が、保護者や地域の方々の間で、早い段階から見られた」などを感じていただいたと思う。

課題としては、「9年間同じ環境で学校生活を送ることの良さの反面、環境を変えてみたい児童生徒や、私立中学校への進学への対応」などのほか、「通学区域の広さ」や、「スクールバスの運用」などが課題と感じられたようだ。

このほか、全体の意見としては、「9年間の子どもの発達段階を全教員が理解でき、連続性が担保されている良さやそれに伴う苦労に対する感想」、その他、「同一学年が複数学級存在するメリット」や「地域とのかかわり方」に関する意見があった。

人見会長からは、この視察に対する意見として、「統合に向けた進め方として、決して学校主導で進めたのではなく、地域主導で進めたのでもなく、みんなで子どもたちの将来のために、だれもが平等に対等に話し合って学校の在り方を考えてきた、それがあそ野学園の今に至っている、そのあたりを委員の皆さんも感じ取っていただけたのではないか。また、大人が昔を思い、自分たちの頃のことをもう一度、今の子どもたちに引き継ぐことばかりに偏るのではなく、目の前の、今いる子どもたちのために、今の我々大人の責任として環境を整えていくんだ、という考え方が、今後につながることかと思っている。あそ野学園の姿は、そういうことが生きている、ということを見とっていただけたのではないかと思う。」などのコメントをいただいている。

私の方からは、1点述べさせていただく。現在、あそ野学園が円滑に学校運営を進められている背景には、学校新設までの経過を特に大切にしてこられたからではないかと思う。関係する小学校同士、小・中学校との間で、子ども同士の交流、教職員の交流などに加えて、保護者や地域の方々への情報提供など、常に共通理解を図るために、丁寧に時間をかけて進められてきたことがあったからであると感じた。

今回の視察は、委員の皆さんに様々な角度からご意見、ご感想をいただいた。

今後の足利市の学校教育についても、非常に参考になるものであり、これからの審議に生かしていければと思う。報告については以上とさせていただく。

4　議事

（1）小中一貫教育制度の考え方

○事務局　「小中一貫教育制度の考え方」について、事務局より説明。

○副会長　ただいま事務局より、小中一貫教育制度の考え方について説明をいただいた。今回は小中一貫教育制度の考え方について、答申の骨子として、審議会の共通理解を図っていきたいと思っている。今後、答申をまとめる際には、全体を見ることになるが、審議を分かりやすくするために、なるべく短い文章で、表記したものを答申の骨子として、審議会として検討していきたい。それでは、事務局案について、委員の皆様からご質問、或いはご意見等があればお願いしたい。

○委員　資料 4 の 5 ページ、「小中一貫教育の推進」で、3 つの文章のうち、2 つ目は「小中学校の再編の時期に合わせて、分散進学の解消を図る」、3 つ目は「小中一貫教育の導入時期」「施設一体型も含めて、検討していく。」とあるが、これらについて、大体いつごろを目安に答えを出すという形で、事務局としては考えているのかお聞きしたい。

○事務局　今後の流れについて、委員の皆様と共通理解を図るために説明をさせていただくと、本審議会につきましては、第 8 回審議会の場で令和 4 年度中の審議会の日程と、審議事項ついて、説明させていただいた。

これは審議会のこれからの議論の進捗状況によって変わってくるものであり、決定事項ではない。まず、令和 4 年度から 5 年度につきまして、諮問事項 2 について、先ほど申し上げた審議事項に基づいて、委員の皆さんにご審議をいただくものである。こちらのものを、概ね令和 5 年の夏過ぎぐらいまでに、審議会の皆様で答申のお考えをまとめていただければありがたいと考えている。

また、答申を基に、行政としての行政計画というものを作らなければならないと考えており、それを、令和 5 年度中ぐらいにまとめられればと思っている。その後、地元などにご説明しながら、令和 6 年度には、その行政の計画の素案をまとめたい。具体的な日付ではないが、事務局としてはこのように考えている。

○委員　第 8 回の審議会でも発言させていただいたが、諮問事項 1 はもうすでにまとまって、今は諮問事項 2 を話し合っている。諮問事項 1 は、2 と合わせて答申するという形の議論だった中で、出来たものから公表して、計画などを進めた方がいいのではないかといった趣旨を発言したので、あらためて質問させていただいた。この審議会は答申を出すということで、様々な分野の方が委員となって、話し合い、答申を出すというのが我々の仕事かと思うが、それと並行しながら、小中一貫教育については、ついさっき始まった議論ではないと思っているので、教育委員会なり、また小学校中学校長会の方もいるので、具体的なやりとりや意見が出ればいいかなという旨で質問をさせていただいた。なるべく

なら、まっさらな形で、審議会の答申を上げていただきたいといった考えかもしれないが、ある程度、教育委員会として、このような考えがあるといった具体的な部分があると、議論がしやすいのではないかと思っている。ナイーブな内容だというのは重々理解をしているが、今日は諮問事項２の議論に関するスタートかと思っているので、意見として発言させていただいた。

○副会長　小中一貫教育制度については、最近始まったものではないということを踏まえて、より具体的に進めていただきたいというご意見であった。他にどうか。

○委員　資料４の５ページ、事務局案の「小中一貫教育の推進」について、３つの文章のうち、１つ目「9 年間を見通した教育課程を編成するなどして、小中一貫教育を推進する」と書いてあり、モデル校区を設定するわけだが、このモデル校区で進める９年間を見通した教育課程の編成というのは、今の小中連携教育という枠の中での９年間を見通した教育課程を編成して進めていく、という考え方でいいか。実際には、まだ小中一貫教育にはなっておらず、施設一体型にもなっていないわけだから、小中連携の枠の中での９年間を見通した教育課程まで踏み込んで、編成をすることをやってみるということが最初ということでいいか。モデル校で教育課程の編成等に触れるということでよろしいか。

○事務局　今の枠ということで小中一貫教育・小中連携教育については、様々な捉え方がある。小中連携教育の中の１つの項目として、小中一貫教育があるといったように文科省は取り扱いされている。足利市においても、小中連携教育については、すでに進めている。その中で、小中一貫校や小中一貫教育としている自治体もあるが、この小中一貫教育に関して、明確な定義がないということが分かってきた。小中連携教育の中で、小中一貫した９年間一貫した教育をやっていけば、小中一貫校となるとか、こういう条件をクリアすれば小中一貫校として文科省が認めるとか、そういった制度ではない。あくまで小中一貫校として小学校・中学校で施設一体型や施設分離型でやっていると言えば小中一貫校という取り扱いになるということと事務局では理解している。そういった意味で、まずはモデル的に実施し、小中一貫校の検証を行い、その優位性を確認しながら、将来の学校再編に向けて、小中一貫教育を取り入れたらどうかと事務局で考えている。

○委員　私の質問が違っていたようだ。足利で今実施している中学校区教育。この枠の中で、モデル校を選んで、教育課程の編成まで広げて研究を進めていくという考え方で、よろしいかという質問であった。

○事務局　中学校区教育について、足利市は諮問をする段階で中学校区教育という言葉が、諮問事項１の検討すべき事項の４つ目にあった。中学校区教育という言葉が、足利独自のものとなっており、小中連携教育とほぼ同意義のものだが、中学校区をより鮮明に打ち出したものが中学校区教育となっている。諮問に基づいて、この審議会で審議を進めていただいているが、ただ、目指すところは、小中一貫校・小中連携教育・中学校区教育とも、9 年間の義務教育学校、9 年間を通して、一貫性を持って取組むということでは、目指すものは同じある、そういった取り扱いをさせていただいている。

○副会長　それでは他にご意見・ご質問等があればお願いしたい。

○委員　今説明していただいて、よく分かった。本市が取り組んでいる中学校区教育、要するに小中連携教育、それをさらに発展させるという形で、より進化させていこうという、その流れについて賛成である。そういう中で、資料４の５ページ、事務局案の小中一貫教育の推進の３つの文章のうち、２つ目に「中学校を中心として小・中学校のグループ化をし」とあるが、この小・中学校のグループ化は、今取り組んでいる中学校区教育の１つのベースとして、それが１つのグループ化と捉えていいのかということ。例えば私の地元だったら、協和中がある。そしてその中学校区には御厨小、筑波小、梁田小がある。また愛宕台中もあるが、それが、事務局が考えている１つの中学校のグループ化ということなのかということをお伺いしたい。もう１つは、そういうグループ化ができたならば、今後の子どもたちの少子化の現状を捉えて、このグループは現状の形で今の中学校区教育で進んでいこうと。このグループは、ピンチをチャンスに変えるという意味で、義務教育学校にするとか、小中一貫校にするとか、そういう議論で、それぞれの地区のそのグループ化した状況の中で、進めていくのか、その辺のイメージがありましたら、教えていただきたい。

○副会長　中学校のグループ化で進めていくにあたり、小中一貫教育とか、その辺についてのビジョンがあったら教えていただきたいとうことであるが、事務局どうか。

○事務局　まず事務局としては、基本的には将来の学校の再編に向けたご審議をいただいているので、現状の中学校区単位がまずどうあるべきかについて、それを委員の皆様に議論していただきたい部分と考えている。さらに、２つ目のことについて、それをイメージしたグループがあれば、その中で、どのような形態がいいのか、つまり現状のやり方でいいのか、それとも委員からご発言があったように義務教育学校がいいのか、もしくは小中一貫校がいいのか、そういったことを今後議論していただくということで委員のお考えのとおりである。グループについては現状ということではなくて、これを審議会として皆さんとともに議論していきたいというふうに考えている。

○副会長　これから議論する中身になるだろうとのことであった。

○委員　今、協和中学校区という話があったので、今取り組んでいる内容について、参考にお話をさせていただく。まず市内の各中学校区では、それぞれ中学校の校長と小学校の校長が例えば月２回集まって、共通理解を図り、課題について取り組んでいる。協和中学校区の学校評議員の意見を伺っていた時に、例えば筑波小からは、大部分が愛宕台中へ進学して、県町と荒金町の子が協和中に進学する。協和中学校区の研修会というのをコロナ前は実施していたが、その時に協和中学校区だけで考えるのではなく、筑波小の子は愛宕台中にも進学するので、協和中・愛宕台中の中学校区として、中学校２校、小学校４校の計６校で考えて、発展させたらどうかというご意見をいただいた。それを受け、昨年度に協和中・愛宕台中の学区の６校で共通する目指す子ども像というのを検討した。通常は夏休みに、協和中学校区の小・中学校で、教職員が協和中に集まり合同で研修会を例年行っているが、今年度は愛宕台中学校区の先生方も集まって６校で研修会をやって、２つの中学校区で子どもたちの９年間を見ていこうという流れで８月に研修会を予定していたが、ご案内のとおり、新型コロナウ

イルスの感染拡大により、最終的に今年度は中止になった。特に筑波小の場合は2つの中学校へ進学となるから、このような形で、中学校区同士で協力しながら進めていきたいと考えているところである。

○副会長　協和中学校区と愛宕台中学校区の計6校で検討を進めて、実際に行われているという事例であった。他にご意見どうか。

○委員　私は保護者よりの意見になると思うが、今の話を聞いて思ったことは、地区によって教育方法などが変わってきてしまっているのかなというのを少し感じた。私自身も生まれ育ったところで現在子育てをしているが、2つの小学校から1つの中学校に進む地区に住んでいる。自分自身もそうであったが、中学校に進学した際、他の小学校から来た子たちの小学校6年間の学びと、自分が育った小学校の6年間は、やはり全然違うものであり面白かった。小学校の流行りも違った。自分の名前の呼び方も、私たちは「わたし」だが、他校の子は「うち」とか独特の呼び方だったので、それが中学校3年間で、もちろん違う小学校の友達とも仲良くなったし、すべてがすべて小・中学校一緒というのもあるかもしれないが、他校の子と混ざり合って楽しい中学校でもあった。子どもたちも、小学校からずっと9年間一緒じゃなくても大丈夫だという思いがそもそもあった。足利市として小中一貫教育の方を推進していくとなると、先ほど色々な地区の話があったが、地区ごとというよりは足利市全体で子どもたちの学びは一律にしていただきたいと思った。私の住んでいる地域では2つの小学校から1つの中学校に進学するが、先ほど協和中は学区が広いし、鹿島町も何百人っていう世帯がいるとのことだったので、そういうふうに差ができるのではなく、足利市の子どもが平等に教育を受けさせていただけるといいと思う。モデル校というのがあってそこだけが、あそ野学園義務教育学校のように、特化するのもあるかと思うが、足利市の子ども全員が同じ教育を受けさせていただきたいなと思う。嫌でも高校受験とか、大学受験でふるいにかけなきゃいけない人生でもあるので、義務教育学校では平等に教育を受けさせていただければなと皆さんの意見を聞いて感じた。

○副会長　ご意見として、共通の教育内容・方法が一緒になればということ。他にどうか。無いようなので、「(1) 小中一貫教育制度の考え方」は以上とさせていただく。

（2）学校再編に向けた基本理念について

○事務局　「学校再編に向けた基本理念」について、事務局より説明。

○副会長　事務局から学校再編に向けた基本理念について説明をいただいた。事務局案について、ご意見・ご質問等があればお願いしたい。

○委員　学校再編について、去る8月12日の下野新聞に市民アンケートを行うと掲載されていた。これらの意見等を踏まえた上で、資料5の2ページ、事務局案にある「良好な教育環境の実現」ということを進めていくと思うが、あくまでも地域の意見は留意事項だということなのか。こちらにも重きを置くということなのか。せっかくアンケートも行うことから、お聞きしたい。

○事務局　まず学校再編アンケートについて、下野新聞に掲載していただいた。事前に皆様にもお配りしたが、学校再編アンケートの趣旨についてもう一度簡単に説明

させていただく。学校再編アンケートについては、現在小・中学校に通っている保護者として、小学校5年生と中学校2年生の親へそれぞれ約1,000名ずつを対象としている。それに加えて、未就学児の保護者を無作為抽出で1,000名、さらに、それらを除いた方々で、地域の声ということで、市民皆様方を無作為抽出で1,000名の方にアンケートを送付するという趣旨であり、アンケートは地域の意見ということではなく、足利市全体の意見をお聞きするというような趣旨である。また次にお話をいただきました「あくまでも地域の意見は留意事項であるか。」ということについては、そういった点を踏まえて、皆様方に十分この場でご審議をいただければと考えている。

○委員　資料5の2ページ「(2) 学校再編の取り組みに対する事務局の考え方」を伺った中で、やっぱり最優先すべきというところは私もそのとおりだと思う。
集団の中で、子どもたちが切磋琢磨するためには、ある程度の同年代の子どもたちが、いないよりはいた方がいい。よく小中学校PTAの色々な会議の中でも、1つの議論の中で、学校の規模によって、少ないところは簡単に済ませる内容のものでも、子どもが大所帯の学校になると、昔はもっと多かっただろうけども、そのやり方じゃ難しいと様々なところで出てくる。そういう時に必ず言うのは、誰のためにやるのかということ。幾ら大人が大変でも、子どもたちのためになるのであれば、それは親が頑張るべきだし、そういう考え方でいくと、この学校再編についても、子どもたちの環境をより良くするためには、最優先すべきことは何かというのをここで明確にすべきだと私も同感である。そこには、地域のコミュニティも子どもたちのより良くする環境の中にも、重点の課題に必ずなってくると思う。ただ、どうしても地域となると、昔はこうだった、自分の頃はこういうことができたと、そういう話にどうしても逸れてしまいがちになる。しかしその時に、常々子どもの今の環境が、どうあるべきかということを、これからも最優先にしてやっていくというところをここで強く理念として持つのは、私は強く同感であり、意見として述べさせていただく。

○副会長　あそ野学園義務教育学校の視察結果の報告の際に、人見会長も同じような意見を述べていた。意見として承りたいと思う。他にご意見いかがか。

○委員　お話の中に、地域のコミュニティの核としてというところ、今は学校現場にいるが、以前は生涯学習の仕事をしており、学校を核とした地域づくり・まちづくりというのを色々な形で関わらせていただいた。今、学校現場にいて、そういった事をすごく感じている。コロナ禍もあり、上手く地域との関わりを持てずに、もどかしいところはあるが、学校が地域のコミュニティの核となるのはそのとおりだなと思っている。先ほどの委員の発言にもあったとおり、保護者や地域の皆様も、学校を拠り所と言ったら言い過ぎかもしれないが、コミュニティの場としてはすごく大切にしていただいている。あそ野学園義務教育学校を新しく作り上げたときにも、離れたたくさんの広い地域、それぞれの地域で、今までやってきたものを集約し、まとめていくかというのはすごく大変だったという現場の教員の話を伺ったことがあり、学校再編を検討するに当たり、地域の方々のご意見はすごく大事になると感じている。先ほど、中学校区教育の話があったが、中学校区教育を現場でも色々と出来るところを模索していると

ころであるが、けやき小では第一中と第二中に子どもが進学するが、第一中の子どもたちは今や半分以上が学区外の子どもたちが来ているというような現状であり、なかなか小中学校の繋がりは難しいと校長先生同士でも話をしている。この小規模特認校制度の立ち位置、今までやってきたものが少し現状とずれてきている部分もあり、課題にもなるというのも校長先生同士の会議の中で話題になったことがあった。色々な話になってしまうが、学校再編という視点で考えたときに、まずは、子どもたちのため、子どもたちにとってどうかっていうところが、最優先だと思うが、今お話しさせていただいたように、地域のコミュニティの核としてはどうなのか。それから、今までやってきた足利市の小規模特認校制度についても、また新しい形に変更していくときに、どういった課題が出るのかというのを、私もそこまではちょっと分からないところも多いが、そういったところも課題を洗い出しながらやっていく必要があると思う。うまくまとまらないが、様々なことを加味しながら、進めていく、とても大事にしていかないといけない問題が多々あるなというのを改めて感じた。

○副会長　学校は地域コミュニティの核である。そして、地域の方々の意見も大切である。あわせて小規模特認校制度についても課題がある中で、結論的には、まず子どもたちのためにどうあるべきか、という意見であった。他にご意見いかがか。

○委員　今は、子どもたちの学校環境をどうしていくかについて話をしており、その先に続いて、学区がどうなったとか、学校の在り方がどうなったとか、結果として、何かの形になって、新しく動いていくと思う。その後も、今の子どもたちが、いつか大人になり、同じ地域で変わっていったその環境で子育てをしていく時に、今のこの話し合いをするときに、学校であったり、保護者であったり、いろんな立場の人が話をしていく中で、皆さんがおっしゃったように地域を巻き込んで、議論がしっかり浸透していくことで、子どもたち以外の大人がまず学校に興味を持ってくれて、そしたら、少しでも子どもたちを取り巻く環境が良くなっていくと思う。今の環境の在り方やこの議論をしっかりと子どもたちにも伝えながら動いていくことも大切だと思っている。きっと今の子どもたちが大人になった頃には、その頃の子どもはもっと減っているかもしれないし、もしかしたら増えているかもしれないが、いつでも学校環境の在り方を考えるときに、中心には子どもたちがいて、その子どもたちのためにどうしたらいいのかを議論している今の大人の姿を、子どもたちにも伝えていけたらいいと思う。大人が学校再編をしたり何かすることにより、すごく遠いところから通っていた子が、バスで通いやすくなるかもしれないし、近かった子が遠くなるかもしれない。私は保護者の代表として参加しており、親は自分の子どものことを中心に考えてしまう。学校との距離や地域との距離ができてしまったとしても、保護者・学校・地域が同じように理解し説明ができれば、子どもたちも同じような理解が出来ると思う。親が動いたら、地域も動きやすくなると思うし、何より子どもたち自身が前向きに自分たちの環境が良くなっていくと思いながら、新しい環境に飛び込んでいける準備も併せて必要だと思い、感想として述べさせていただいた。

○副会長　特に今いる子どもに、どんな動きをしているとか、どんな学校編成に変わっていくかということも伝える必要があると感想をいただいた。

○委員　事務局案について、特に意見があるわけでは無いが、ただ学校再編を考えていくときに、特に留意しなければならないのが、災害時の地域の避難所をどうしていくかというところも、市全体として考えていかなければならないと思う。今、小・中学校のほとんどが地域の避難所になっており、それが再編されて、例えば、避難できる小学校なり中学校なりまで、3～4 キロというふうになった場合に、高齢の方などが歩けないから、皆で車に乗り合わせて行くといったように、近所の方は話していたりする。そういうふうに、令和元年の台風 19 号もあったので、大きな災害時に、学校がその地域の避難所となる拠り所になるということもあると思う。事務局案の文面を変えるというのではなくて、そういった点も一緒に考えていかなければならないと思っている。

○副会長　学校としてだけではなく、災害の時の避難場所であるということも検討の 1 つではないかという意見であった。

○委員　先ほど発言したところに補足として述べさせていただくが、いい機会だと思う。学校再編をするにあたって、地域コミュニティの核という話が先ほどあったが、地域の大人が学校や子どもたちに何ができるのか、関わり方を色々な所で議論はされていると思う。だとしたら、資料 4 の 5 ページの事務局案にも書いてあるが、2 つ目の文章「中学校を中心として、小・中学校のグループ化」とある。良いのか悪いのか分からないが、そのグループの中に、その中学校区にある地域を組織化して入れると、お互いに関わっていきやすいのかなというのが、私の中にイメージがあった。常に何かある度に何ができるのか、災害が起きたときに、避難所だったら、どんな動き方ができるのかなど。それぞれ議論する中で、常に中学校区の地域が組織として存在していると、何かの時に常々議論ができるのかな、学校に関われるのかなというようなことを検討してもいいと思った。雑な意見になってしまうが申し訳ない。

○副会長　中学校区の中に、地域の方々が参画するって言葉が合うかどうか分からないが、ご意見として頂戴する。

○委員　今の発言について、私も近いことを考えていたので、お聞きしたい。地域連携教員という方が各小・中学校におられる。現実何をしてくださるのか、自治会長も、育成会長も知らない。各地域の家庭教育懇談会とかそういったところにも来てくださっていると思うが、せっかく先ほどの委員が述べたような形で、何かやろうよとした時に、その先生方が何かやってくださるのか、或いは何か我々のリードしてくださるのか、そういったことが分かれば、地域コミュニティの核というところに入ってくれないかなという気がしたが、教育長に何かご意見があればお聞かせいただければ思う。

○副会長　質問となるが、教育長については、審議会のオブザーバー参加となっている。事務局からどうぞ。

○事務局　各学校には、地域連携教員という方を校務分掌に位置付けており、特に学校の子どもたちを中心にしたときの様々な学習、そのために、地域の方へいろいろとお願いするため、またコーディネートするための教員として位置付けている

ところである。実際に子どもを中心として考えているところであるので、地域の方との繋がりについては、地域連携教員のほかに、教頭、または校長なども含めまして、学校評議員など、地域の方に呼びかけて、結びつきもしているところである。さらに、地域連携教員のほかに、地域において地域コーディネーターを置くことになっている。地域コーディネーターの方と地域の連携教員が上手に機能することにより、ある学校では図書ボランティアを立ち上げて、地域コーディネーターの方とうまく機能していったとこともあるので、その辺の活用について、今のご指摘をいただき、ありがたい。

○副会長　校務分掌で、地域連携教員が位置付けられているということで、もっと前面に出していただきたいということであった。
それでは、私の議事進行については、ここで終了させていただく。大分時間を取ってしまい、会長のようにいかず、申し訳ない。
ご協力ありがとうございました。事務局に議事進行をお返しする。

○事務局　本日は委員の皆様から様々なご意見をいただきましたので、会長と副会長、事務局で皆様のご意見を踏まえながら、答申案をまとめていくのは、もう少し後になりますので、またそのときにお示しするようなことになっていくことになるので、よろしくお願いしたい。

5　その他

○事務局　学校再編アンケートの進捗、広報あしかがみ９月号の掲載記事、次回審議会について連絡。

6　閉　会